

アクティブ・ラーニングに至る教育改善

長谷部 秀孝*

1. はじめに

我々が大学で勉強した時代の講義はひどいものであった。何年も使っているような古いノートをただ読み上げるような講義、学生のほうを一度も見ずにただ喋りまくる講義、黒板に書きまくるような講義が横行していた。講義に不満は持っていたが、筆者は休まずに出席していた。まさか大学で教えることになるとはその当時は考えていなかったが、どんな講義であれ熱心に受けることで得るものがあつたと思う。当時はそれでよかったのかもしれないが、現在では通用しない。新しい考え方のもとに講義を作っていかなければならない。

そのような経験から、創価大学で教えることになるとう教育改善に興味を持つようになった。しかし、教員になりたての若手がしていることに興味を示すベテラン教員はおらず、逆にそのようなことをしてもだめだと諫められた。そのような状況にも懲りずに39年間教育改善を続けてきたが、それをここで書き留めておきたいと思う。

筆者は幸いにも学外のシンポジウム¹にたびたび参加する機会を得ている。また、学内で行われた研修会にはほとんど参加している。独自に開発するようなことはできないので、研修会に参加することはお勧めである。そのまま使うことはできないが、改善のヒントを得ることができる。創価大学の実情に合わせて、カスタマイズさせればよいのである。これからの内容はそのような視点で作ったアイデアが中心となっている。

2. シラバス

すでに現在では、シラバスの有効性は周知されているところである。それどころか、誰もが必ず配布しなければならないものと考えられている。しかし、筆者が教職に就いたころはそうではなかった。1年間の授業の内容を知らせるなどは誰も考えていなかった。実態は、その場限りの授業で、年間の授業の情報は、簡単な内容説明だけであつた。筆者はそれに対して疑問を持っていたが、それ以上の行動をすることはなかった。

筆者は、1986年の4月から長期在外研究のため、イギリスの London School of Economic and

* 創価大学名誉教授

1 3月初めに開催されている、コンソーシアム京都の「FD フォーラム」は役に立つ内容を提供してくれる。毎年出席する価値があると思う。また、現在では終了しているが、京都大学の溝上教授と東京大学の中原教授が主催していた「大学生研究フォーラム」も役に立った。

Political Science (LSE) に滞在することになった。そこで見たものがシラバスであった。どの授業も最初の時間に、少なくとも A4 の用紙に 2 枚程度のシラバスが配られた。それには、授業の全体の計画と、参考文献が書かれていた。LSE の授業は、15 回前後で終わるものが多く、2 枚程度のシラバスで、授業を選択するには充分であった。学生はシラバスをもとに授業を選択していた。現在、創価大学で用いられている Web 上でのシラバスに比べると簡単であったが、学生に授業の情報を前もって伝えるという考えはその当時はなかったので、画期的に思えた。

1987 年の 3 月に帰国すると、次の学期²から LSE と同じぐらいの簡単なシラバスを配ることにした。簡単であっても 30 回の計画なので、非常に大変であった。また、計画を伝えてしまった後はそれを守らなければならないので、それも大変であった。余計な話をしたのでその回の途中で終わってしまい、残りは次回というわけにはいかない。計画的に授業を進めていく責任がある。

次の段階として、予習復習のために役立ててもらうことがあった。『財政学』については、簡単な授業内容を書くとともに、そのトピックに合致する参考文献を盛り込んだ。毎回読むことは無理であろうが、二冊でも三冊でも読んでほしいと考えて、簡単に読める新書を中心に選ぶことにした。今の大学生は本を読まないということが言われているが、初期の段階では授業終了時に新書の内容を聞きに来る学生も結構存在した。このようにいろいろな情報を盛り込んだために、最後には A4 の用紙 8 枚になっている。

シラバスのメリットとしては、教員にとっても、1) 年間計画を作るようになること、2) 計画的に授業を進めるようになること、などが考えられる。学生にとっては、1) 授業の全体像をつかめること、2) 予習がしやすくなること、などがある。デメリットとしては、1) シラバスに拘束されて内容に柔軟性がなくなること、2) 学生がシラバスにこだわりすぎること、などがある。

シラバスについてはどの大学でも必須事項になっているのでこれ以上書く必要はないであろう。

3. 教材

教材については、授業内容に合ったものが必要であろう。これについても LSE で学ぶことは多かった。授業では必ずハンドアウトが配られていた。また、事前に読むようにかなりの教材を配る教員もいた³。テキストは指示されているのだが、これだけに頼らない姿勢が見えた。

在外研究に行く前に学内でも良い経験をした。一般教養の『経済学』において授業担当者全員で検討して、授業で使う教材を自分たちで作ったのである。特に、同じ科目を複数の教員で担当⁴するとき重要な点である。この経験がのちに生きてくる。最初は、事前に印刷して前の週に配っていたが、手間がかかるので原稿を小冊子にまとめて事前に簡単なテキストとして安く販売することにした。そのテキストは今も手元にあり、時々参考になっている。自分たちで作ったも

2 当時はセメスター制をとっていなかったもので、週 1 回で 30 週講義することになっていた。

3 教材配布の場所があり、授業の前にそこから取って読んでおく。

4 その当時、教養の『経済学』は 1 年生の必修の教養科目であった。そこで、360 人の 1 年生を 60 人ずつ 6 クラスに分けてそれぞれにクラス担任を置き、担任が教養の『経済学』を講義することになった。理論経済学を専門とする教員と関連科目である筆者がそれに充てられた。

のであるので、非常に使いやすくなっている。

その経験を生かしたのが、初級のマクロ経済学の授業である『ミクロ経済学A』であった。この科目は1年生が最初に習う科目で、先の教養の『経済学』と同じ位置づけであった。初級の科目、特に入学したばかりの学生に対しては丁寧に教える必要がある。そこで、50～60人ずつ6クラスに分けて、同じシラバス、同じテキスト、同じ試験で授業を行った。その際に採用したのがMankiwの『マンキュー経済学1 ミクロ編』であった。これは自分たちで作った前述のテキストと同じような考え方で作られていた。たくさんの大学教員が実際に使用して、その意見を吸い上げて作り上げていったテキストである。初級のテキストとして内容が吟味されており、難しいことは入っていない。具体的な数字や図を使って説明がなされており、親しみやすい内容となっている。テキストは予習復習に使ってもらわなければならないが、そのためには、読みやすく興味をもってくれるようなものでなければならない。どんどん自発的にテキストを使ってくれば、授業もやりやすくなる。このテキストが優れている点は、学生が経済学に興味を持つような内容になっていることである。特に、入学間もない1年生に対してはそのようにしなければならない。ミクロ経済学にはきっちりとした論理形式ができており、初心者にはとっつきにくいところがある⁵。それが経済学を嫌いになる原因になっては困るのである。

高校までほとんど勉強したことのないミクロ経済学を、形式的に教えられても興味を持っていないであろう。講義の内容の工夫も必要であるが、教材についても工夫をする必要がある。このテキストは、身近なトピックを取り上げるとともに、難しいことはより上級の科目に任せて基本的に必要な内容だけを取り入れている⁶。

『財政学』などの他の科目ではテキストを使わなかったので、教材づくりには工夫をした。Mankiwにならって、興味を持てる、簡単にわかる教材を心掛けた。第一に、文字を並べるだけでは読んでくれないので、なるべく表や図を使って分かりやすくまとめた。第二に、その日の授業が目指しているポイントが明確であるようにした。第三に、数字などは、なるべく新しいものにした。第四に、新聞などで報道される情報は、別刷りにしてなるべく早く学生の手へ渡るようにした。

4. アクティブ・ラーニング(1) —ディスカッション

最近ではアクティブ・ラーニングが当たり前のように言われているが、これは非常に難しいと思われる。最初に、扱いやすい少人数クラスであるゼミから始めた。これは3段階に分けてディスカッションがうまくいくように工夫した。

第1段階：まず、テーマ設定である。ゼミ生を4～5人のグループを作り、グループごとに話し合っ

5 学生に聞くと、これまではこの初級のミクロ経済学でつまづいて、経済学が嫌いになったという声がかなり多かった。

6 上級科目である『ミクロ経済学中級』は必修ではないが、ほとんどの学生が履修している。

なる課題図書⁷を決めることにした。決まった図書をゼミ生全員に購入させて、その内容を共通知識とする。必ず全員がきちんと読んでくる。これが守られることと学生の負担の意味合いから、新書を用いるのがよいであろう。新書なので必ずしも十分な知識と情報が得られるわけではない。レポーターはその不足分を他の専門書⁸で補って、プレゼンテーションでは十分な情報を提供することになる⁹。

第2段階：レポーターのプレゼンテーションをもとに次の週にディスカッションをすることになる。ゼミ生全員では多すぎるので、2つぐらいに分けて時間を決めてディスカッションをする。各々のグループでまとめた結論を発表させて、グループ間でもう一度ディスカッションを行い、全体としての議論を深めていく。

第3段階：前の週のディスカッションをもとにして、テーマを決めて次の週にディベートを行うことになる。テーマ¹⁰に関する予備知識は十分とはいえないまでもかなり身につけているので、ディベートで論理を深めていくことは意義のあることである。また、即興で反駁の内容を考えなければならぬので、かなり討議能力がついてくる。思いがけない論点を持ち出されても、何とか論理的に切り抜ける力がついてくる。

このようにして、学生に論理的に考える力をつけさせることが必要である。テーマ設定の際の工夫は、学生が興味を持つテーマにすることである。そうしないと真剣にディスカッションに参加しないし、ディベートも空回りする。意味のあるテーマにするためにも、教員がテーマ設定の際にかなり積極的に介入する必要がある。グループ・ディスカッションの際にはグループ分けするので教員の目が届かない。上級生をアシスタントにするのも1つの方法である。ディベートでは、参加している学生もなかなか全体をつかめないで、終わった後の講評が重要である。そのために、ビデオ撮影をして後で見返すようにするのも勉強になる。DVDにして自分たちで復習させるようにしたが、自分がどのような発言をしたのかが分かりよい復習となる。

メリットは、1) 論理的思考力がつくこと、2) 討議力がつくこと、3) 創造力がつくこと、などである。また、デメリットとしては、1) 型にはまった考えをすること、2) レポーターの主張に頼りがちになることなどがある。教員がアドバイスをするのであるが、テーマの選択を誤ると悲惨な結果になることもある。

7 当時は、テーマが年間9～10出てきたので、その数だけ新書を読むことになった。買わないで借りるようにはという声もあったが全員買うようにした。大学生であるので、本を買うことの喜びを知ってもらいたかった。

8 学生に図書館に親しみをもって頻繁に利用してもらいたいと思い、赴任2年目にライブラリー・ツアーを実行した。ゼミの学生16名を引き連れて書庫に入れるように交渉したが、図書館は前例がないと渋っていた。そこを何とか説得して、ゼミで使う図書やいろいろな資料を筆者が説明した。学生は感激していた。その結果であろう、翌年から図書館独自のライブラリー・ツアーを実施することになる。書籍を勉強に使うためにも図書館の実態を知っていなければならない。

9 最近では専門書ではなくウェブ上から情報を集める傾向が強くなった。これについてはメリットとデメリットを周知徹底する必要がある。

10 本式のディベートをすると1回しかできないが、みんなにディベートを経験してほしいので、時間を縮めて簡易版を作り、全員がディベートをすることとした。5分ぐらいで立論をするのだが、学生にとってはそのぐらいがちょうどよい時間であったようだ。

次に、大人数の授業におけるディスカッションである。『財政学』についてはディスカッションをすることで問題を深められるのでディスカッションを取り入れたかったが、受講者が多いことで二の足を踏んでいた。しかし、これも外部での研修会で World Café を教えてもらい、大人数でも可能であることがわかった。

方法としては、受講者を5～6人のグループに分ける。グループの数が場合によっては20もできることになる。最初は自由にグループを作らせたが、学生の要望で抽選によって機械的にグループ分けをすることにした。紙に番号を振り同じ番号の学生を1つのグループにさせるのである。ほとんど全員が出席するのであれば、事前にグループ分けできるのであるが、ゼミと違って World Café の時間になると休む学生が多くてそれができなかった。特に、ディスカッションが嫌いな学生は休んでしまい、通常の授業より10%も出席率が悪くなった¹¹。これは解決しなければならない問題であろう。

テーマについては、授業と関連付けることが重要である。事前に予備知識を与えるとともに、宿題を出してテーマの予備調査をさせることが必要である。

当日は、ストップウォッチで時間を計って議論を進める。次のような順序である。

- ① 本日の趣旨説明
- ② アイスブレイク — ミラーリング
- ③ ディスカッション開始
- ④ リーダーの移動
- ⑤ リーダーが戻って、グループの主張のまとめ
- ⑥ 各グループの発表
- ⑦ マインド・マップのスライドを使っての全体でのディスカッション

World Café の特徴は、ディスカッションの終盤で、リーダーが他のグループに移動して、他のグループの意見を聞くことである。それによって幅広い意見が聞けて気づきができるようになる。90分の授業では移動は1回しかできなかったが、できればもう1回ぐらいできるとよいであろう。これが全体で議論できないことを補完する役割を果たしており、World Café という名前がついている理由である。また、最後にマインド・マップのスライドを使ってまとめをすることで、教員の考え方も加味することができる。

そこで、メリットであるが、1) 授業の内容を深めることができること、2) 討議力を高めることができること、3) 社会問題に興味を持たせること、などである。逆にデメリットは、1) ディスカッションを不得意にしている学生は授業を回避すること、2) 授業の内容に依存して自分の視野を広げようとしないうこと、3) 自分自身で論理的に考えるのではなく社会で広まっている考えを主張しがちであること、などである。

11 やりたくはなかったが、出席率を上げるために、World Café も成績評価の対象にする と 脅し を かけ た。すると、今度は、出席はするがお客様になって全くディスカッションに加わらない学生が出てきた。

5. アクティブ・ラーニング(2) ―クリッカー

クリッカーも重要な教育機器で、アクティブ・ラーニングの手段として有効であろう。受講生の数が多いと、なかなか学生が授業に参加することも難しい。その点クリッカーは、簡単に参加ができる。学生の考えを確かめるために、挙手をさせることも同様な効果が得られるが、最近の学生は恥ずかしがってなかなか挙手をしない。クリッカーなら自分がどの答えに賛成しているか、他の人に知られずに意思表示ができるので、気楽に参加できるようだ。手順としては次のようになる。

- ①授業内容をよく検討して、どこでクリッカーを使うか決める
- ②各々の個所で、設問と回答を作成する（パワーポイントで作成）
- ③授業中にタイミングを見計らって学生に回答させる
- ④正解を発表するとともに、解説をする

最初は、クリッカー専用機種を使っていたが、端末が立派すぎて持ち運びに非常に苦勞した¹²。そこで、情報システム部との協力のもとで、スマートフォンにクリッカー機能をつけることを共同で開発した。スマートフォンのほうが、1) クリッカー端末の配布などの手間が省けること、2) 学生が授業終了後でも問題を確認できること、3) どの学生がどのような回答をしたか、教員は後で調べることができること、4) 回答の理由を書かせることができること、などのメリットがある。実験はしなかったが、クリッカーを使つての成績評価もできるのではないかと考えている。

クリッカーのメリットは、1) その場で考えさせることができること、2) 問題の作り方によって知識量を問うことができること、3) 授業への参加意識を持たせることができること、4) 自分の意思表示を他の友達に知られることがないこと、などである。デメリットとしては、1) 教員から見えないので手抜きをすることができること、2) 設問の仕方を工夫しないと、単純で面白くない授業になること、3) お遊びになってしまいかねないこと、などである。機器が目新しいうちは全員参加していたが、そのうち手を抜く学生が出てきた。クリッカー端末は持っていくがボタンを押さない学生が出てきたのである。評価にかかわるようにすれば防げるのだが¹³。それはスマートフォンになってからも同じであった。

専用機種のクリッカーではできないが、スマートフォンであればいろいろな工夫ができるのではないか。筆者は開発に参加したが、本格運用は翌年1年だけであった。それでも次のような工夫をした。前述の World Café であるが、全体での意見発表の際は私がマインド・マップのソフトで集計した。したがって、ソフトを持っていない学生は生のデータは見られず、私が集計したものだけを見ることになった。しかし、スマートフォンのクリッカーにある意見を述べる機能を使うと、学生はいつでも他のグループの意見を見ることができるようになる。ディスカッション

12 1 ケースに 32 個しか入っていないので、100 人を超すような授業では 4 ケース必要になり、教員 1 人ではとても手に負えない。購入の際には使い勝手も考えなければならない。

13 評価ができない理由は、少数であるがスマートフォンを持っていない学生がいたことである。100 人前後の授業で調べたが、2～3 人が持っていなかった。

にも応用できるようになる。

6. アクティブ・ラーニング (3) — 演習

最初にアクティブ・ラーニングを始めたのはミクロ経済学中級の授業であった。これも LSE での経験であるが、教員の講義の後に演習の授業があり、宿題の問題を解かなければならなかった。筆者は出席しなかったが、留学している日本人は必死になって問題を解いていた。語学のハンデがあるのでディスカッションの演習では点数が取れないが、数学系の問題を解く演習はあまりしゃべらなくてもよいので点数稼ぎができると張り切っていた。

LSE で見た様な演習を創価大学でもできないかと考えていたが、TA (Teaching Assistant) が利用できなかった¹⁴ので実現不可能であった。その当時担当していたミクロ経済学中級は、数学も使うかなり形式的な解き方をする科目なので、できる学生なら対応できると考え、SA (Student Assistant) として協力してもらうこととした。都合よく、理論同好会¹⁵という経済学を勉強するサークルができて優秀な学生に依頼できることが可能となった。

当時 100 人を超える学生が受講していた。そこで、30～40 人に分けてグループを作り、演習の時間だけ各グループは別の教室で授業をすることにした。まず筆者が通常の授業をして、内容を詳しく説明して理解させるようにする。その後に宿題を出して、演習のための準備をさせるようにする。演習の時間には、その宿題の解答を黒板に出て書かせる。なるべく多くの学生に解かせるために、1 問につき 4～5 人当てることにした。各々の学生に説明させた後、SA が解説を加えることになる。SA は事前に集まって、説明が同じになるように打ち合わせを行っている。SA をお願いしたのは、1) なるべくたくさんの学生に解かせること、2) わからない場合はすぐに教えて正解に導くこと、3) 学生がやる気をなくす発言はせずほめること、などである。そして、筆者は各教室を回り、SA の手に負えないような質問について、説明をすることとした¹⁶。

成績評価の際にこの演習の際に問題を前に出て解いたことも加えるようにした。1 回黒板に出て問題を解くと点数をあげることにした。そうしないと、問題を解かない学生が出てくるからである。初期の段階はうまく機能して、学生は一生懸命取り組んでいた。先生より SAの方が教え方はうまいというような学生も出てきた。定期テストの結果を見ても、成果は上がっているようであった。

メリットであるが、1) 問題を解く機会が多くなること、2) 受講者数が少ないので質問が容易になること、3) 教える方の SA の勉強にもなること、などがあげられる。デメリットとしては、

14 経済学研究科では、留学生がかなり多い。また、専攻も理論関係の院生が少ないので、TA としては利用できなかった。

15 経済理論を勉強しようという自発的な考えからできたサークルである。後に、経済学検定試験で連勝を重ねていく。たがいに教えあうという趣旨でできたので、他人を指導することには非常に熱心であった。

16 教員は各クラスを回って、SA が答えられない質問に備えることにしたが、そのようなことはほとんどなかった。また、重要な点について追加で説明するような役割を行った。

1) 当てられて返事をせず、正解だけを写していく学生が出てくること、2) 学生ということで SA を馬鹿にする学生が出てくること、3) SA も教えてやるという上から目線の学生が出てくること、などである。

初期の段階は優秀な SA を採用できたのであるが、そのうち受講生にとって好ましくないような SA が出てきて、10年ほどでやめることになる。この演習の経験の中で困ったことがある。正解を印刷して渡すようにしつこく要求する学生が出たことである。授業に出て黒板に出て解答した仲間や、SA の説明を聞いていれば正解はよくわかるのであるが、プリントにして渡すように要求された。正解だけを暗記するからそれはできないと拒否したが、その後も度々要求された。どうしても正解にこだわる姿勢は何とかなければいけない。考えるプロセスが重要であることをきちんと理解させなければならない。

7. アクティブ・ラーニング (4) — 反転授業

前の演習の経験からも、学生に自発的な学習をさせたくて、最後に取り入れたのが反転授業である。これは、授業と予習とを逆転させるもので、準備された教材を使って予習の時に本格的な内容を教材で勉強し、本番の授業時間では復習と問題を解くようなことをする。手順は次のようになる。

- ① 授業の動画をポータルサイトにアップする
- ② 学生がそれを見て学習する
- ③ 授業の最初にノートのチェックをする
- ④ 疑問点や分からないところの質問を受ける
- ⑤ 前の回の演習問題の回答をしながら、前々回の復習をする¹⁷
- ⑥ ディスカッションをしたり、問題を解いたりして学んだ内容を深める
- ⑦ 科目によっては復習のための宿題を出す

動画については 15分前後が限度であろう。筆者は最初、前年度に収録した授業のビデオを編集して 15分程度に縮めて使ったが、これは評判が悪かった¹⁸。素人が編集したことで流れが途切れてしまい、内容をとらえにくいようであった。そこで、CETL (教育・学習支援センター) に相談して、パワーポイントが使えることを知った。パワーポイントで 15分ぐらいの動画を作成

17 最初は、授業の最後に演習問題を解かせてそれを即座に回収して、次の時間の前に返すようにしていた。しかし、短時間ではなかなか問題が解けず、宿題にしてほしいという要望が出てきたので、宿題とした。次の時間に回収して次の次の時間に返却して、解説をするようにした。

18 このビデオは、すべての回の授業を録画したもので、順番にすべての授業が対象になることになっていた。筆者の授業は 2 回目に担当となり、早くにビデオが手に入った。最初は、欠席した学生の勉強のために利用することになっていたが、ほとんど利用されなかったようだ。それではもったいないので反転授業に利用しようと考えた。編集は自分ではできないので、時間を指定して専門家にしてもらったが、学生には不評であった。ビデオは、パワーポイントの画面と講義している教員の画面の 2 つに分かれており、パワーポイントの方に教員が近づくと教員が消えてしまう。その点がおかしいと指摘された。

して、ポータルサイトにアップした。これだとスマートフォンでも見る事が可能である¹⁹。

反転授業については、予習の方法が分からないという学生の声を聞いて導入を決めたものであるが、学生の反応は芳しいものではなかった。第一に、アップしたビデオを見てくれなかった。15分でも時間がないと主張された。第二に、見てもきちんとノートを取ることがなかった。仕方がないので、ノートを取るポイントを押さえたプリントを配ることにして、授業の冒頭でチェックすることにした。第三に、わからなくても質問は出てこなかった。とにかく、成績にかかわること以外については、非常に消極的であった。第四に、『ミクロ経済学中級』では、解いた問題の正解だけを欲しがって、考え方にあまり注目されなかった。

メリットとしては、1) 自発的な学習習慣がつくこと、2) 授業時間に余裕ができて学習内容を深めることができること、3) 自分で内容を発展させる創造力がつくこと、などである。しかし、デメリットとしては、1) 学習の意図が理解できない学生はやらされている感が出てくること、2) 自主性に任せているので、決められたことをやらない学生が出てくること、3) 自主性がない学生は、結果だけを求めること、などである。

学習の習慣がないのであろうか、ビデオを見ない学生がかなり出て苦労した。見たことの証拠としてノートを作らせたが、授業直前に友達のノートを移して見せる学生がおり、なんらかの工夫が必要である。また、ノートをチェックするためには教員のほかにも人手が欲しい。TAやSAなどでよいのだが、『財政学』などになるとTAやSAでは対応できないことも出てきて、難しい。

8. キャリアデザイン(1) — 『社会貢献と経済学』

講義でキャリアデザインを意識すれば、キャリアデザインの特別な授業はいらないと考えている。その最たるものがアクティブ・ラーニングであろう。アクティブ・ラーニングが普通に行われていれば、就活対策のための授業は必要がない。グループ・ディスカッション、プレゼンテーションなどは十分に対応できる。ゼミでのプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートはまさにそうであろうし、通常の授業でのアクティブ・ラーニングもキャリア形成に非常に役立つ。

新入生がしっかりとした目標をもって勉強できるようにすることは重要である。目標がないので何を勉強したらよいか迷ってしまう。新しい取り組みとして導入した『社会貢献と経済学』は、経済学を勉強することが社会と結びつくことを自覚させるためのものである。その意味ではキャリア科目といってもよかろう。働くことは社会貢献であり、経済学はそのために役に立つことを勉強するものである²⁰。経済学がキャリア形成に役立つこと、経済学の勉強が社会に出て役に立つことなどを初期段階（1年生の時）に意識づけることを目指した。経済学とは何かを知らずに入学してくる学生は、勉強する意欲を失いがちである。経済学が将来につながることを知れば、

19 Think Board というソフトも試してみた。これは教員が習熟するまでにかかなりの時間がかかり、それよりも簡単で慣れているパワーポイントが便利で、そちらを使うことにした。我々は片手間に教材を作成するので、よい機能を持っていても習熟するまでに時間のかかるようなものは良くない。

20 この取り組みは、「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（産業界 GP）」の一環として行われた。

勉強する意欲もわいてくるであろう。

内容は3つに分かれており、1つは趣旨に合った講師を招聘してオムニバス形式で講義をしてもらうことである。この時重要なのは聞きっぱなしにしないことである。学生が主体的に授業に参加し、質問したり意見を言ったりすることである。そのため必ずグループ・ディスカッションを行い、発言をさせるようにした。2つ目としては、創価大学の卒業生に来てもらって、自分の職業と経験をもとに課題を出してもらい、それを解いてプレゼンテーションしてもらうことである。これももちろん経済学に絡んでいる。3つ目としては、そこまでの授業内容を踏まえて、こちらから出したテーマに基づいて、アイデアを出してプレゼンテーションをしてもらうことである。

1つ目の講師の選考であるが、JTBの力を借りることにした。我々が知らない情報を提供してもらっている。また、のちに取り上げるインターンシップの受け入れ先である、ホテル観洋の阿部女将に来てもらっている。東日本大震災の経験を話してもらうとともに、働くことの意義を話してもらっている。2つ目の卒業生であるが、自分の失敗談なども交えながら、働くことの意義を話してもらう。その経験から課題を出してもらい、学生が回答を考え出して報告することになる。学生が考えるのにちょうどよい課題を作ることは難しく、卒業生の選考には注意が必要である。また、セキュリティの問題などで、社員が業務に絡む話をするのを好ましくないとする企業があるので要注意である。

学生たちに経済学を含む社会問題には1つの決まった正解はないことを実感してもらう。その考えを確かなものにするためにも3つ目のアイデアは重要である。出されたテーマにそって自分たちが考えたアイデアを競うことになる。最近では東日本大震災の被災地である宮城県の南三陸町の復興アイデアを競うことが多かった。

9. キャリアデザイン(2) — 東北復興インターンシップ

もう1つは、インターンシップである²¹。インターンシップの意義は、学生にとっては就業体験を得られることである。社会全体としては、学生が社会において有効な人材になるように育てることである。最近の学生はアルバイトもあまりしないようで、昔の学生に比べると就業体験が少ないようである。そのため、1～2週間と期間は短いけれど、就業体験をすることは意義のあることと考えられる。

しかし、受け入れ先の企業を回って懇談する中で見えてきたことがある。必ずしも就業体験になっていないことである。20年ほど前の初期の段階では全く研修内容が分かっていないようで、訪ねて行った我々に、何をしたらよいのか尋ねるような企業も少なくはなかった。最近ではさす

²¹ 創価大学はインターンシップを他大学に先駆けて導入している。20年以上前に全学でインターンシップを行い、初期に筆者はそのコーディネーターをしていた。全学から50人の学生を選抜して、週1回の事前研修の後夏休みに2週間のインターンシップを行った。大学で依頼した企業は大企業ばかりで、学生の意向と企業をマッチングさせるのに苦労した。その後、他の9大学とともに、ドイツでの海外インターンシップも行った。

がにきちんと研修内容が決まっているようである。しかし、かなりの企業ではインターンシップ生のための特別メニューが作られており、通常業務とは違っている。したがって、必ずしもきちんとしたその企業の通常業務を体験できるわけではない。いわば企業見学会に終わっている。そこで、本来の就業体験が可能である、新しいスタイルのインターンシップを目指すことにした²²。

簡単に言えば、夏休みと春休みに行く、2週間のホテル観洋でのインターンシップである²³。ホテルでのインターンシップは今までもあったが、このインターンシップの特色は次のような点にある。第一に、運営をJTBが行うことである。参加者の募集だけは大学が行うが、それ以外はすべてJTBが行うことになっている。第二に、きちんと事前事後の研修を行うことである。経験者からの情報も含めて、かなり広範な研修となっている。第三に、東日本大震災の被災地救援の意味合いが込められている。インターンシップでも有償のものがあるが、ボランティアの意味合いも込めて無償で行っている。現地はまだ労働力不足であり、繁忙期における重要な労働力となっている。第四に、学生が東日本大震災を学ぶ機会になっている。2週間の間に4回現地の人の話を聞く機会²⁴を作り震災を学ぶことにしている。仕事をしながら、現地の人の話が聞けてその面でも震災を学んでいる。第五に、ホテルから課題が出されてそれを解決するアイデアを考えると、課題解決型も加味されていることである。第六に、創価大学、ホテル観洋、JTBともに、Win-Winの関係になっている。

インターンシップがうまくいかない原因は、受け入れる企業にとって一方的に負担になっていることである。インターンシップの間は、受け入れた学生のお世話係として職員を付けなければならず、その職員は通常業務ができない。また、学生が見学に行った部署では通常業務の妨げになるなどの負担が発生する。さらに、インターンシップを採用活動と勘違いをしている企業もあり、引き受けた学生が就職してくれないと嘆かれることも度々あった²⁵。インターンシップの本来の目的は、社会全体で若い人たちを育成していくことである。しかし、そのような状況を見ると、まだわが国でのインターンシップは本来の意味でのインターンシップになっていないようだ。最近ではワンデイ・インターンシップが横行して、学生の混乱を招いている。

22 インターンシップには、就業体験型と課題解決型の2つの形がある。就業体験になっていないことは本文で述べたが、結構課題解決型も多かった。課題が出されて期間中にグループで解いてプレゼンテーションをするスタイルである。筆者も度々その発表会に来るように要請されて、講評をさせられた。

23 このインターンシップは、東日本大震災の1年後に筆者たちが被災地を訪れた際、ホテル観洋の阿部女将との話し合いから生まれたものである。当時は震災によって従業員が不足しており、それを解決する方法として考え出された。始めてみると様々な問題が出てきたが、JTBが緩衝材となり解決して現在に至っている。このような運営方法は、通常のインターンシップにも有効であろう。

24 『復興応援塾』として、時間を取っている。震災後に自力で立ち上がって起業をした人を招いて、働くことを学んでいる。

25 筆者が学部長であったときに、経済学部で海外インターンシップを始めた。最初は、イギリスのマンチェスター、次に、カナダのバンクーバー、そしてオーストラリアのメルボルンと広がっていった。インターンシップを始める前に、受け入れ企業を訪問して感心したことは、口をそろえて社会のため学生のために行っていると話すことであった。自社に就職してくれるわけではないが、社会のために若者を育てる責任があると考えているようだ。この点、わが国は遅れている。

10. おわりに

以上のように、39年間を通して様々な授業の改革を行ってきた。授業は勉強する方法としてもっとも効率的なものであると考えているが、教員だけがそう思っても学生には伝わらない。学生たちも授業の意義をきちんと理解してこそよい授業となるのである。同じことを繰り返しているとなちまち風化してしまう。

筆者の体験では、新しい試みを行うと、面白いという反応が必ず返ってくる。しかし、同じことをそのまま数年繰り返していくと必ず学生の反応は悪くなる。面倒であっても、その試みの意義を繰り返し周知させることが必要なのであろう。毎年行っていることという教員側の気のゆるみを学生は敏感に感じ取るのかもしれない。

また、教員1人では改善にも限度がある。痛感したことは、補助の人間が欲しいことと資金が欲しいことであった。1人でやっていると時間がかかりすぎることも、補助がいればスピーディーに行うことができる。そうすれば授業の緊張感も維持できる²⁶。

授業改善はこれからも促進されるであろう。若手の教員の皆さんにはより一層のチャレンジ精神を望みたい。

26 反転授業でノートのチェックをする場合などそれを痛切に感じた。できれば、ノートをチェックするときに質問に答えるのがよい。しかし、1人ではそれも限りがあり、全体で質問がないか求めることしかできなかった。全体に問うと手を挙げるものは少ない。また、World Caféで最後のまとめで意見をパソコンで打ち込むときも、補助が打ち込んでくれれば学生との対話ができて有意義になると思った。